

学術調査報告書

2008年 3月 26日

(フリガナ)	フルカワ アキラ	入学年度	2004年度
申請者名	古川 哲	学年	3年

研究題目	繁茂する革命—20-30年代プラトーフ作品における、自然と人間
主任指導教員	高橋 清治

(1) 学術調査の目的

ロシア革命の時期に作家として出発し、ソ連が国家として確立していく時代に主要な作品を遺したアンドレイ・プラトーフ（1899-1951）に関する博士論文執筆のための資料収集が今回の調査の目的である。博士論文では、修士論文（「アンドレイ・プラトーフの『土台穴』における受動性と受難をめぐって」、修士（学術）、2004年3月、東京外国語大学）で十分に明確に論じることができなかつた「受動性」の問題を、問題設定を変えつつより深く追究してみたいと考えている。対象と媒介なしで接してみたいという直接性への希求、またそれゆえの〈恐怖〉という感情を強くテキストに定着させたという点でプラトーフは際立っている。そのような対象への直接性への希求がプラトーフにおける受動性を生んでいる、という作業仮説を現在の筆者は立てている。そのような受動性が現われる一つの局面として、登場人物が自然との関係においてとる態度がある。「繁茂する革命」という研究題目は、筆者の、作品に現れる自然と人間の関係を重視しつつ革命の問題を扱いたいという意図からきている。アンドレイ・プラトーフがソビエト作家同盟の委嘱により1935年に著した中編『ジャン』は、とりわけ第三章の冒頭において、自然描写と登場人物の行動に緊密な関連がみられる。言い換えれば自然描写がプロットとの関係において必然性をもって配置されている。それゆえに自然と人間の関係を論じるには適切な箇所だと考えられる。すでに、筆者はこの箇所について考察し発表したことがある（「アンドレイ・プラトーフ『ジャン』におけるオリエンタリズムについて：問題提起」、『現代文芸研究のフロンティア 7（21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集）、北海道大学スラブ研究センター、2005年、pp.149-153.）が、今回の調査はこのとき行った

作業の継続でもある¹。

具体的には、ロシア国立文学アルヒーフ（Российский государственный архив литературы и искусства、以下РГАЛИと表記する）に収蔵されている、中編小説『ジャン』のタイプ原稿（ф. 2124, оп.1, ед.хр. 75：後の議論でのテキストB）を閲覧したうえで、必要な部分の複写を行うことを予定していた（現地についてから少し計画を変更したが、そのことについては次項目を参考してほしい）。この原稿は、作者の手稿をもとにしてタイプストが打った原稿である。ここに、作者による加筆訂正があると本稿の筆者は予測していた。

ここで、博士論文では公刊されたテキストの分析を主に行うつもりであるにもかかわらず筆者が草稿の閲覧を試みた理由を書いておきたい。今回の作業には、将来的に生成論的観点から草稿研究を行うことを想定した練習という目的があると同時に、筆者がこれまで主に使用してきた、ナターリヤ・コルニエンコ氏による校閲を経たテキストの信頼性を部分的にではあれ検証することに当面の作業にとっての意義があると考えた（本稿(4)で触れたが、プラトーフについて決定版といえる全集や著作集がない現状ではそうである）。

この原稿の所在は、近年のプラトーフ研究を主導してきたコルニエンコ氏の博士論文（Корниенко, В.Н. Творческая биография и текстология А.П.Платонова (В художественной лаборатории писателя): диссертация ... доктора филологических наук. / Институт мировой литературы РАН. – М., 1992）で確認してあった。この文献表ではプラトーフによる手書き原稿も挙げられていたが、作家の遺族の所有とされているので、今回の調査では上記のタイプ原稿のみに対象を絞ることとした。また、アルヒーフが休館する土曜日には、ロシア国立図書館（レーニン図書館）で、公刊された文献（研究書も含む）を探すことも予定に含めた。

(2) 調査実施地および期間

モスクワ（ロシア）、2008年2月25日～3月11日。

(3) 学術調査の具体的な実施内容（詳細に記入すること）

二週間という滞在期間を考えると事前にアルヒーフに連絡を取っておかないと史料の閲覧に割ける時間が足りなくなるかもしれないと歴史研究に従事する友人から助言を受け

¹ 同研究所のウェブサイト、<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no9/contents.html>でも読むことができる。

たので、出発の約一週前に РГАЛИ にファックスを送った。そしてその中で、自分が参照しようとする草稿の書誌を伝えておいた。その際、主任指導教官（高橋先生）の紹介状も添えた。また、プラトーフ関連の史料にアクセスできないことも想定して、作家同盟に関する史料にも関心があることを伝えておいた。

ロシアに到着した翌日の 2 月 26 日（火曜日）に РГАЛИ で入館証を作成した。その際、自分の連絡先、研究テーマ、在籍する研究機関や学位などについてアンケートに記入することを求められた。このとき、アンケートの用紙に前もって送信しておいたファックスがホチキスでとめられていたことから、事前の連絡がきちんと認知されていたらしいと確認できた。無事に目的の史料を閲覧できたのはその二日後、28 日木曜日で、マイクロフィルムでの閲覧が許可された。РГАЛИ のマイクロフィルム部は別の棟にあり、隣接する軍事アーヒーフ（РГВА）の建物内の一室にある。草稿のコピーがほしい場合は、マイクロフィルムで必要なページを指定した上で、再び請求をする必要がある。また、新しい史料を請求する際には手持ちの史料をすべて返却しなくてはならない。

今回は、当初の計画を変更し、複写はやめてノートに手書きで第三章を中心に筆写した。その理由は、1. 注目している箇所を前もって絞っておいた、2. 草稿の最初のページに作者の署名入りで手書きにより「タイピストが原稿を作成してから訂正はない」（п.1）と書かれており、実際には前もって期待していたような著者による訂正がなく、その訂正を通して最終稿にいたる意図を推し量るといった目的にはそぐわないことがわかった、の二点である。

以上が今回の調査の主要な作業であるが、ロシア国立図書館（レーニン図書館）でも、最近のプラトーフ研究（具体的には、2005 年～2006 年にモスクワに留学していた際にかなり網羅的にカタログの閲覧を行ったので、今回は 2006 年以降に発表、刊行された研究）について、オンラインの蔵書目録で検索を行い、重要だと思われるものについては閲覧・複写を行った。そのなかで、『プラトーフの戦争小説の芸術世界』（Спиридонова, И.А. Художественный мир военных рассказов А. Платонова : автореферат дис. ... доктора филологических наук : 10.01.01 / Петрозавод. гос. ун-т. 2006.) を発見、複写できたことは収穫であった。これまで正面切って論じられることが少なかった 1940 年代にプラトーフが第二次世界大戦をテーマにして書いた作品を扱った博士論文（正確には、論文の筆者自身によるその内容を要約した冊子）であり、筆者が扱う 1920～1930 年代の作品の特徴を考察

する上でも役立つ論点（主題の連続性など）を含んでいる。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

具体的な検討に移る前に、プラトーフ研究の現状を手短に補足しておきたい。ソ連の文学においては、検閲というファクターが強く作用しているゆえに、刊行されたテキストが普通に言われる意味での「最終稿」（著者の意図がもっともよく反映された原稿）とはいえないという事情がある。それはしばしば編集サイドによって加筆訂正が施された上で刊行されたのである。そのような事情があるために、ソ連における草稿研究は、作家が最終的にテキストとして定着させた本当の（検閲によって書き換えられる以前の）言葉に辿りつくことを目的としており、そのうえで、その最終稿に作家がいかにして辿りついたか、いかなる内面的な発展のプロセスのなかに最終稿が位置するのかを探るといった課題（生成論的な観点）も達しようとしている。プラトーフ研究においてもそれは例外ではなく、ソ連時代は長い間、ソ連の研究者は文書館にある未刊の作品にアクセスできても論文で自由に言及することはできず、国外の研究者はソ連は未刊の（刊行を禁じられた）作品に言及することもその作品の草稿を研究することはできないという状況が続いた(Томас Лангерак. Андрей Платонов: Материалы для биографии 1899-1929 гг. Амстердам: Издательство Пегасус. 1995. を参照)。1980年代以降の情報公開の流れの中で、そのような状況は改善され、近年この作家にかんする着実かつ興味深い成果は生成分析（генетический анализ）の手法を採る研究によってなされてきている。そのような実証的な研究を精力的に主導してきたのが、モスクワの世界文学研究所のナターリヤ・コルニエンコ氏であり、プラトーフの作品を網羅的に収録した著作集も、氏の主導で準備されつつある(Андрей Платонович Платонов. Сочинения. Том первый 1918-1927. Книга первая. Рассказы Стихотворения. Москва: ИМЛИ РАН. 2004. Андрей Платонович Платонов. Сочинения. Том первый 1918-1927. Книга вторая. Статьи. Москва: ИМЛИ РАН. 2004. など)。

§

今回の調査で得た史料をもとにした考察に移る。実際に請求し閲覧できたタイプ原稿に作者の訂正がなかったことから筆者は調査の目的を変更し、プラトーフの主要な作品が収録された、コルニエンコ氏が校閲し最終稿をよく反映しているとされる一巻本の選集(Андрей Платонов. Избранное М.: "Гудьял-Пресс", 1999 : 後の議論でのテキスト A)がタイプ

原稿をどの程度反映しているかを検討するという目的で筆写を行うことにした。

さらに、作家の死後になって始めて、〈雪解け〉の時期に公刊された『ジャン』のテキストと対比することにした。ロシア国立図書館の監修によるプラトーフに関する文献目録（Андрей Платонович Платонов: Жизнь и творчество: Библиогр. Указ. Произв. Писателя на рус яз., опубл. В 1918 – янв 2000г. Лит. о жизни и творчестве/ Рос. Гос. б-ка; Сост.ред. В.П. Зарайская; Науч. Конс. Н.В. Конрнниенко. – М.: Пашков дом, 2001.）を参照すると、『ジャン』が最初に公刊されたのは1966年の一卷本の選集であることがわかった（Андрей Платонов. Избранное. Москва : Московский рабочий , 1966. : 後の議論でのテキスト C）。その作業を通してソビエトにおける検閲の実践に関して具体的に（筆者が持っている論点に即して、という限定付きではあるが）知ることで、1930年代以降作品を発表する機会を大きく制限されたプラトーフの作品が没後になって読者の手に届くという「第二の誕生」の内実について一定の見通しを得られると考えた。この観点では、検閲は著者の原稿を歪曲するもののみ捉えられることはなく、検閲者により一貫する意図を持って体系的に行われるものとも理解される。この観点はもはや狭義のプラトーフ研究の範囲には収まりきらないが、ソビエト文化論全般に関心を持つ筆者にとって、将来的な研究の展望を与えるという意味で有意義だと考える。

今回の報告書では、先に言及した筆写の論文で取り上げた箇所の一部について、対照を行ってみたい。以下は、モスクワからトルクメニスタンに、砂漠に暮らし滅亡に瀕した少数民族に定住生活を与えてよりよい生活をさせるために派遣された主人公が、列車を途中下車し徒歩で目的地に向かい始めるという、この主人公がモスクワに代表される秩序から離れて別の世界に参入し始める契機を描いた部分である。ここで重要なのは、引用箇所前半でなされる自然描写が、登場人物がさらに茂みへと分け入っていく行為と緊密に結びついていることだ。というのも、そのような描写とプロットとの緊密なつながりに注目することで、自然からの刺激に開かれた（言い換えれば自然に対して受動的な）この作品の登場人物の行動の、顕著な一例を見出すことができるからである。なお、登場人物がこの箇所が作品全体のなかでもつ意義については上述の拙稿（「アンドレイ・プラトーフ『ジャン』におけるオリエンタリズムについて：問題提起」）を参考にしてほしい。

まずコルニエンコによる1999年の版（テキスト A）から引用しよう。

Чагатаев отошел еще дальше. В степи что-то шевелилось и покрякивало, она казалась

бесшумной лишь для отвыкших ушей. Земля стала опускаться в низину, началась синяя высокая трава. Чагатаев, с интересом воспоминания, вошел в траву; растения дрожали вокруг него, колеблемые снизу, разные невидимые существа бежали от него прочь – кто на животе, кто на ножках, кто низким полетом – что у кого имелось. [.....]

Забыв свое дело, Чагатаев почувствовал запах влаги; где-то вблизи было озеро или колодезь. Он направился туда и вскоре вошел в какую-то небольшую, влажно растущую траву, похожую на маленькую русскую рощу. Глаза Чагатаева притерпелись ко мраку, он видел теперь ясно. Затем начался камыш; когда Чагатаев вошел в него, то сразу закричали, полетели и заерзали на месте все здешние жители. В камышах было тепло. Животные и птицы не все исчезли от страха перед человеком, некоторые, судя по звукам и голосам, остались, где были. Они испугались настолько, что, ожидая гибели, спешили поскорее размножиться и насладиться. Чагатаев знал эти звуки издавна и теперь, слушая томительные, слабые голоса из теплой травы, сочувствовал всей бедной жизни, не сдающей своей последней радости. (Стр.

345.日本語訳は次のとおり。: チャガターエフはさらに遠くに離れた。ステップでは何かがかすかに揺れて、ときおり叫び声が出た。ステップが静かに思われたのは耳が慣れていなかったからに過ぎなかった。大地は低地への下り坂となり、青くて背の高い草地が始まった。チャガターエフは、思い出していくことの興味深さにつられて草のなかに入った。根元をゆらされた草が彼の周囲で震えていて、いろいろな見えない生物が彼から離れて走り去っていった、あるものは腹ばいで、あるものは脚で、あるものは低く飛んで—それぞれが持っているものを使って去っていった。(中略)

自分の仕事を忘れたチャガターエフは、水の匂いを感じた。どこか近くに湖か井戸があったのだ。彼はそのほうに向かい、じきに、ある小さな濡れた、生育しつつある草地に入ったが、それは小さなロシアの茂みに似ていた。チャガターエフの目は闇に慣れ、彼はいまやはっきりと見ることができた。そしてアブラガヤの茂みが始まった。チャガターエフがそのなかに入ると、そこに住んでいたすべてのものたちはすぐに叫びだしたり、飛んでいたり、その場でそわそわしはじめた。茂みのなかは温かかった。動物や鳥は人間を前にした恐怖で全員が消え去ったわけではなかった。音や声から察するに、その場に残ったものもいた。彼らはあまりに驚愕したので、破滅が近いと考え、少しでも早く繁殖し楽しむとしたのだ。チャガターエフはそうした音を昔から知っていて、いま温かい草地か

らの苦しみを伴ったかすかな声を聴きつつ、最後の悦びを手放さない全ての哀れな生命に共感を覚えた)。

つぎに、РГАЛИ で筆写してきたタイプ原稿 (テキスト В) の該当箇所を引用する。

Чаганаев отошел еще дальше. В степи что-то шевелилось и покрикивало, она казалась бесшумной лишь для отвыкших ушей. Земля стала опускаться в низину, началась синяя высокая трава. Чагатаев с интересом воспоминания вошел в траву, растения дрожали вокруг него, колеблемые снизу, разные невидимые существа бежали от него прочь – кто на животе, кто на ножках, кто низким полетом : что у кого имелось . [.....]

Забыв свое дело, Чагатаев почувствовал запах влаги; где-то вблизи было озеро или колодезь. Он направился туда и вскоре вошел в какую-то небольшую, влажно растущую траву, похожую на маленькую русскую рощу. Глаза Чагатаева притерпелись ко мраку, он видел теперь ясно. Затем начался камыш; когда Чагатаев вошел в него, то сразу закричали, полетели и заерзали на месте все здешние жители. В камышах было тепло. Животные и птицы не все исчезли от страха перед человеком, некоторые, судя по звукам и голосам, остались, где были. Они испугались настолько, что, ожидая гибели, спешили поскорее размножиться и насладиться. Чагатаев знал эти звуки издавна, и теперь, слушая томительные слабые голоса из теплой травы, сочувствовал всей бедной жизни, не сдающей своей последней радости . (л. 24)

最後に、1966年の版 (テキスト С) による該当箇所を引用する。

Чагатаев отошел еще дальше. В степи что-то шевелилось и покрикивало, она казалось бесшумной лишь для отвыкших ушей. Земля стала опускаться в низину, началась синяя высокая трава. Чагатаев, с интересом вспоминая, вошел в траву; растения дрожали вокруг него, колеблемые снизу, разные невидимые существа бежали от него прочь – кто на животе, кто на ножках, кто низким полетом – что у кого имелось . [.....]

Вскоре Чагатаев почувствовал запах влаги; где-то вблизи было озеро или колодезь. Он направился туда и вскоре вошел в какую-то небольшую, влажнорастущую траву, похожую на маленькую русскую рощу. Глаза Чагатаева притерпелись ко мраку, он видел теперь ясно. Затем начался камыш; когда Чагатаев вошел в него, то сразу закричали, полетели и заерзали на месте здешние жители. В камышах было тепло. Животные и птицы не все исчезли от страха перед человеком, некоторые, судя по звукам и голосам, остались где были. Чагатаев знал эти

звуки издавна и теперь, слушая томительные слабые голоса из теплой травы, сочувствовал всей этой бедной жизни. (стр. 229-230).

上記の三種類の原稿を比較して、一ページ弱のテキストに少なくとも六つの相違があることがわかる。これらに注釈を行うことによって、この報告の結びとしたい。テキストの異同が見られる箇所に筆者が強調を施した。同じ強調は異なるテキスト間で対応する箇所を示す。また参考のために 1999 年の版を日本語に訳出した。

1. 一重下線で強調した部分 (チャガターエフは、思い出していくことの興味深さに
つられて)

この箇所では、テキスト A と B において句読点の打ち方に異同が見られるが言い回しそのものは с интересом воспоминания で同じなのに対し、テキスト C においては с интересом вспоминая となっている。前者の言い回しは「関心・興味」を意味する語 интерес に「回想・想起」を意味する語 воспоминание が修飾を施している。そしてその言い回し「回想することの興味 интерес воспоминания」のまえに前置詞 с (~とともに) がおかれることによって、全体として「回想することが興味深く」のような意味になる。それに対して後者の言い回しは、回想するという意味の動詞 вспоминать (不完了体) から形成された副動詞の前に、「興味深く」という副詞句がおかれることによって成立している。テキスト C の言い方は、それ以外のテキストの言い回しとの比較において、より堅苦しきでない言い回しであるといえる (概して、名詞のあとにもうひとつの名詞を生格形にして付け加える言い方は、学術論文などで意識的に用いられる傾向がある)。しかしその一方で、テキスト C の言い方では、「回想」は「関心・興味」とともに単に並列するだけなので、テキスト A と B においては統辞の上で「興味・関心」の対象となることが明示されていたのとは異なる意味を持ってしまう。コルニエンコ氏は、タイプ原稿の言い回しを維持することで、文体の晦渋さと論理的な構造を 1966 年のテキストに対して守ったといえる。

2. 二重下線で強調した部分 (自分の仕事を忘れた)

この部分も 1. と同じように、テキスト A と B が共通した言い回しを採用し、テキスト C だけが異なっている。テキスト A と B では забыв свое дело となっているのに対し、テキスト C では вскоре となっている。前者は副詞句であり、動詞 забыть (完了体) から形成された副動詞のあとに、目的語として「自分の仕事 свое дело」が目的語としておかれて、言い回し全体としては、「自分の仕事を忘れて」という意味になる。それに対して後者は、

この箇所が副詞（**вскоре** 間もなく、じきに）に置き換えられている。このことによって、テキスト C では、この前後の描写および出来事が、時間的継起のみで結びつくものへと変化している。このことは、テキスト A と B においては出来事の継起と語りの持続のなかで「忘却」というモチーフが入っていることに対して明確な違いを産んでいる。また、**вскоре** という副詞が次の文で繰り返されることになってしまい、語数にすればわずかな違いが文体的にもテキスト A と B に対してまったく異なる効果を持つ文を産む結果となった。この箇所でも、コルニエンコ氏は、タイプ原稿の言い回しを維持している。このことによって、タイプ原稿における言い回しの意味・文体が保たれたといえる。また仮にテキスト C の言い回しが検閲の結果によるものだとすれば、この改変は、プロットと個々の言い回しの必然的な関係を断つことによって、プロットとの関連である言い回し（この場合は **забыв свое дело**）が強い印象を残す効果を妨害する、という意義を持つとも考えられる。

3. 太線の下線で強調した部分（濡れた、生育しつつある）

この部分も、1. や 2. と同じく、テキスト C だけが異なる言い回しを採用している。テキスト A と B において、「湿った **влажно**」が動詞 **расти** の能動形動詞現在形を修飾するという統辞が採用されているが、テキスト C ではこの部分が **влажнорастущий** という一語（副詞に由来する接頭辞＋動詞の能動形動詞現在形）へと変化させられている。この二つの違いによって生じる効果としては、「湿った」という副詞が一語として分かち書きされているテキスト A と B よりも、動詞と結合させられたテキスト C のほうが、この副詞のもつ独立性が低まっている（すくなくとも統辞のうえでは、また可能性としては意味の上でも）ということができる。

4. 波線で強調した部分（そこに住んでいたすべてのものたち）

この部分では、テキスト C だけに、「すべて **все**」という語が欠落している。テキスト A と B ではこの「すべて」という語が、つづく箇所の、茂みの中の生物についての「全員が消え去ったわけではなかった」とか「その場に残ったものもいた」という記述と対応することで、人間が不意に茂みに現れたことに対してすべての生物が驚いた後に、その反応がいくつかに分岐していく様子が段階的かつ具体的に理解できるようになっている。テキスト C における「すべて」という語の削除は、そのような効果を弱める意義を持っていると判断できる。

5. 灰色で強調した箇所（彼らはあまりに驚愕したので、破滅が近いと考え、少して

も早く繁殖し楽しもうとしたのだ)

この箇所はテキスト C においてのみ欠落している。このことは、続く箇所にある形容詞「苦しみを伴った томительные」の意味をより一面的なものにすると考えられる。

6. 囲み線で強調した箇所 (最後の喜びを手放さない全ての哀れな生命に)

この部分は、テキスト A と B には現れるが、テキスト C では対応する箇所が書き換えられ、всей этой бедной жизни となっている。この場合、этой (「この」) によって не сдающей своей последней радости (「最後の喜びを手放さない」) が置き換えられている。このことは、前述の、灰色で強調した箇所が同じくテキスト C で削除されていることと同様の効果を持ち、何が「哀れ」なのかについての理解をテキスト A と B を読んだ場合に比べて不明確なものにする。

以上の検討から、コルニエンコ氏による校閲は、句読点を変更している箇所があるものの、タイプ原稿の言い回しを保っているということが、すくなくとも検討した箇所については言える。また、モスクワに代表される権力を、中央アジアの自然に触れることで「忘却」というモチーフをなるべく目立たせない方向で 1966 年の版は訂正がなされているという印象を受ける。より具体的には、人間以外の生物の繁殖に触発されて登場人物が共感を覚えるという部分が削除されていることは、なぜ主人公が列車ではなく徒歩で自然の中を歩いて目的地に向かおうと思ったのか、ということの理解をより困難にすると思われる。総じて、プロットと自然描写は 1966 年の版において概ね保たれているといえるが、その二つが与える効果を凝縮しかつ強める言い回し (「自分の仕事を忘れた」や「繁殖し楽しもうとした」など) が一貫して削除されている。

このようにして、タイプ原稿をもとにしての、コルニエンコ氏による校閲を経た『ジャン』のテキストに対する部分的な検討と、「雪解け」期に公刊されたテキストの検討を通じて校閲の実践を具体的に知るといった課題を達することができた。これらの成果は、筆者の当面の課題である博士論文執筆に使うテキストの信頼性にある程度の根拠を与え、またその後の研究へと展望をひらくものであり、筆者にとって有意義であったと判断できる。